

# 第一次大戦をめぐるボーンとデューイの対立

小 西 中 和

## はじめに

ランドルフ・ボーン (1886-1918) という人は我が国であまり馴染みがないかもしれないが、平和思想の領域においては、第一次大戦へのアメリカの参戦に強く反対し、それを支持したりベラル派知識人、特にジョン・デューイを痛烈に批判したことで有名である。戦争の終わりとともに夭折したこともあって「ボーン伝説」が生み出され、アメリカにおけるラディカルな知識人の一つのあり方のような評価もなされている。デューイの平和思想の理解においてボーンによる批判が影響を及ぼしており、ラッシュュやキャリアのようなレヴィジョニストはボーンに依拠してデューイ批判を行うことが多く、またハウレットやウェストブルックもボーンに従うようなデューイ理解を示している。そこに見られるのは、デューイの参戦支持が「プラグマティックな理性によりも盲目的な願望」に基づくものであり、戦争反対を唱えたボーンの方が「目的と手段、目的と結果についての批判的で具体的な分析」を行っているという見方である<sup>1)</sup>。しかし、このような理解がはたして妥当なのかどうか疑問である。デューイが直接また明示的に反論を試みていないせいか、ボーンの方が正当であるかのような受け止め方が多いようであるが、小稿では、いくつかの論点に即して両者の対立の意味を検討し、さらに大戦後におけるデューイの平和思想の転換の背景を探ってみたい。

1) Westbrook1991,p.202, Howlett,pp.4-5. 「ボーン伝説」については, Resek,p.x iii, Bullert1983,p.60を参照。レヴィジョニストの議論は, Lasch,p.53-55, Karier,pp.28-29を参照。ボーンとの関連でデューイを擁護するのは, Ratner,p376. 他に, Levineや Bullertを参照。ボーンの生涯については, Claytonが詳しく、和書では、本間長世が紹介している。

## I デューイの平和主義者批判

アメリカの参戦によって戦争が「すでにほとんど全般的である」状況になったにもかかわらず、あくまで戦争反対を叫び続ける平和主義者たちがいた。その中にはアダムズ (Addams, Jane) のようなデューイの親しい知人たちもいた。しかし、デューイは戦争が国民の生活のあらゆる局面に様々な形で影響を及ぼすことになる<sup>2)</sup>ときに、戦争について「中立的」であるべきではないと語った (1917 i.p.158)。戦争の結果は否応なく我々の生活に及ぶのであるから、ただ何でも反対を唱えるのではなく、それに何らかの主体的な対応をする方が望ましいと考えた。そして彼はその観点から平和主義者の態度の根底に「モラルの問題を扱う方法」の問題性を見いだしたのである。

平和主義者は「殺すなかれ」という絶対的な倫理規範に基づいて戦争に対応する傾向があり、また、宣戦布告の局外に身を置き、何もしないことによって、責任が果たされると考え、さらに、いかにコントロールされたあり方においても力の効率を否定した。デューイによれば、これらは「目的を手段から分離し、かくして骨抜きにされた目的をモラルと同一視するという根深い習慣」の現れであり、戦争に懐疑的な国民、とりわけ若者が戦時下において国家への忠誠との関連で抱く「良心の多くの当惑の原因」であった (1917c, p.578)。これは「社会的状況のコントロールの代わりに個人的な感情の中にモラルを見いだす傾向」であり、福音主義的なプロテスタントの伝統によって育まれた。また、「知性の吟味に曝されるように行為の社会的条件や結果に対して関心を示すのではなくて、決められた規則や命令に対して感情を付着させるという習慣」に基づくものであり、アメリカの形式的な法律尊重主義の伝統に影響を受けていた。

平和主義者の良心の主たる関心は「自らの内部で汚点のない状態を維持すること」、つまり戦争反対の心情の純粹さを尊重することであり、彼らが手段としての戦争の考え方を否定することもそのためである。これに対して、デュー

2) デューイの著作からの引用箇所は、刊行年とページ数を本文中に挿入して示すことにする。引用文中の括弧内は原文のもの。以下同様。

イは良心つまりモラルのあり方を「内面的意識の感情的要求や命令から客観的な事実の明るみへ取り出す」ことを提起する。そうすれば社会的状況のコントロールや知性の吟味に基づく行為の社会的条件と結果への注目という局面において人間のモラルのあり方が問われることになる。したがってこの観点からすれば、「平和を愛するようになればなるほど（もちろん平和によって軍事的戦争の単なる不在を意味しない）、いかにして平和を維持する機構が創り出されるべきかを自らに問わざるをえなくなる」というのである（Ibid.,p.579）。デューイはここでモラルのあり方の二つのタイプを語っているが、それらはおそらくマックス・ウェーバーの言う「心情倫理」と「責任倫理」に近似していると言ってよい。<sup>3)</sup>心情倫理は、「純粹な心情の炎、たとえば社会秩序の不正に対する抗議の炎を絶やさないとだけに「責任」を感じる」のに対して、責任倫理は、「「善い」目的を達成するには、道徳的にいかがわしい手段、少なくとも危険な手段を用いなければならず、悪い副作用の可能性や蓋然性まで覚悟してかからねばならないという事実、を回避するわけにはいかない」、「人は（予見しうる）結果に責任を負うべきだ」と考える立場である。<sup>4)</sup>ウェーバーによれば、いずれが善いとか悪いとかを倫理的に決定することはできず、また両者を妥協させることは不可能である。

デューイは戦時下において平和を望む良心のあり方について次のように述べた。「危機的時期において事件を動かす力が良心にとって常に手に余るとすれば、その救済策は事件を操作する人々の邪悪さを非難することではない。そうする良心はだいたい自惚れている。救済策は別の方向に動いている諸力と良心を結びつけることである」（Ibid.,p.580）。だが、このような観点からの戦争への関わり方を真っ向から批判したのがボーンであった。以下において、ボーンの批判の意味を探ってみたい。

3) Ceadel,p.5, Farrell,pp.309-310,334, Howlett1989,p.82.

4) ウェーバー, 89, 90頁。

## Ⅱ ボーンのデューイ批判

ボーンは「戦争という非常時において生の哲学としてのデューイのプラグマティズムは不適切である」と指摘し、「我々が長い間従ってきたデューイの哲学は音を立ててほとんど崩れている<sup>5)</sup>」と述べた。ボーンはデューイがアメリカの参戦を支持したことをもって彼の哲学の全面的否定を主張したわけである。ではデューイの哲学はどこに欠陥があって、参戦を支持することになったというのであろうか。

別稿<sup>6)</sup>で見たように、デューイが参戦を支持した理由、換言すれば戦争目的は二つの側面で考えられた。一つはドイツの無警告無救助の攻撃という潜水艦戦による脅威に対してアメリカの国民の安全を保障するということであり、もう一つは、戦争の結果として新たな平和的国際秩序を創出するということであった。ボーンはこれに対して、まず、アメリカの安全保障は武装中立の政策で実現可能であり、地上軍をヨーロッパに派遣することになる参戦は必要ないとした。次に、平和的秩序の創出という良い目的のために戦争を手段として使用するというが、戦争はそのような目的を実現するどころか、逆に市民的自由の抑圧といった目的を裏切るような結果を副作用として生みだしているのではないかと批判したのである。

ボーンによれば、本来のデューイの哲学においては、「手段は常にユートピア的な目的に貢献する位置に置かれていた」。つまり人間による目的の選択が可能であり、手段と目的の関係は正常であった。だが、戦争を受け入れた結果、戦争遂行以外の目的の選択が不可能になり、「価値が技術に目的が手段に従属させられる」ことになった。「デューイ哲学の実際の結果はヴィジョンを犠牲にして技術の感覚を発展させることだった。彼自身は両者をとともに発展させようとしたけれども、戦争の影響の下で彼においてさえも価値が弱体化している

5) Bourne1917e,p.53.

6) 拙稿「第一次大戦とデューイ」『彦根論叢』358号

ように見える<sup>7)</sup>」というのである。ボーンの主張に含まれているのは政治における目的と手段の関係をどう見るか、現実の状況との関連で目的の定立のあり方をどう考えるかといった問題である。もしボーンの批判が妥当するとすれば、確かにデューイの哲学の崩壊を語ることができるのかもしれない。しかし、そう言う前に、ボーンの主張の内容とその意味をデューイの思想に照らして捉え返すことが必要であろう。以下において、ボーンの武装中立政策に見られる「リアリズム」、戦争状況と人間の選択の可能性、戦争と知識人の役割という問題に即して検討してみよう。

### 1. 武装中立政策とボーンの「リアリズム」

アメリカの商船が無警告無救助のままに攻撃されるという事態は国民の安全の保護という根本的な問題を提起するものであった。ドイツ政府はその作戦がアメリカの参戦を引き起こすことを承知の上で軍部の突き上げにより決定した。デューイはそれを「受けて立つしかない挑戦」として受けとめ、参戦でもってそれに対抗することを支持した。それに対してボーンは参戦ではなくて武装中立という政策を採るべきであると主張した。従来アメリカは中立政策を採ってきたが、それを維持しつつ、しかもドイツの潜水艦戦の再開に対応するために、武装した中立政策が妥当であった<sup>8)</sup>というのである。武装中立とは戦争に訴えることなく、海軍の武力行使によって攻撃してくる潜水艦を破壊し、公海での自由な航行という中立国の権利を確保し、商船の安全な航海を保障することである。したがって、ボーンは戦争にこそ反対しているが、あらゆる軍事力の行使に反対する絶対的平和主義の立場ではない。さて、筆者は軍事戦略の専門家ではなく、ボーンの主張の妥当性を検証する能力を持たないので、1917年4月2日のウィルソン大統領の戦争教書から次の引用を試みておきたい。

「去る2月26日に議会で演説したときには、武装中立で足りると考えていた。しかし現在の状況では、武装中立は実行不可能である。ドイツ政府は封鎖海域

7) Ibid., pp.60,61

8) Bourne1917c.pp.25-26.

での中立国の権利を否定している。武装中立は実際上交戦国としての権利と戦力を欠いたままでわが国を確実に戦争に引き入れるのである<sup>9)</sup>。ウィルソン大統領は武装中立策がいずれ戦争に行き着かざるをえないと見ていたが、ポーンは参戦ではなくて武装中立で十分と考えた。

ポーンは戦争よりも武装中立が望ましい理由として次のような点を上げている。武装中立は戦争に比べて「状況に迅速にかつ効果的に対応する方法」である。つまり、戦争準備にかかる手間を省いてドイツの潜水艦戦に即座に対応できるというわけである。また、武装中立がうまくゆけば、潜水艦戦が効果のないこと、したがって勝ち目のないことをドイツに分からせることによって「戦争をもっと迅速に終わらせることができたであろう<sup>10)</sup>」。

さらに、中立期にウィルソン大統領が提唱した「勝利なき講和」を実現するためにも戦争を避けるべきであった。なぜなら、アメリカの参戦は交渉による平和を促す代わりに、連合国内の全面的勝利を欲求する勢力を助長し、他方でドイツ国民を絶望的な戦争遂行に向かわせるという思わざる結果をもたらすことによって、かえって戦争を長引かせることになったからである。それと比べれば、武装中立によってアメリカが中立国の立場を保持し続けていれば、交渉による講和の調停者として、また新たな国際秩序の創出の有力な主体としてリーダーシップを取ることができたであろう<sup>11)</sup>。しかし、参戦はそれを不可能にし、その結果アメリカの戦略は「勝利なき講和」から「軍事的決着のための徹底的消耗戦争」へと旋回した。それとともに、「戦争テクニク」の体制化をもたらし、「国民の士気を高揚させたり、巨大な軍事体制を創り出りだす」ことになったというのである<sup>12)</sup>。

ウィルソン大統領の戦争教書はドイツに勝利することによって既存の軍国主

9) 大下, 158頁。

10) Bourne1917c,p.25.

11) しかし、アメリカ史家のシャノン<sup>11)</sup>は、「ウィルソンが1917年1月22日に「勝利なき講和」の演説をしたとき、ドイツは1月9日すでに全面的勝利のために潜水艦作戦の再開を決定し、ウィルソンの望む交渉による講和を問題外としていた」と指摘している(Shannon,p.165)。

12) Bourne1917c,p.31.

義的な支配体制を打破し、新たな国際秩序を創り出すことを述べていた。「世界を民主主義のために安全にする」という宣言であった。ボーンによれば、これは民主主義を世界に押しつけようとするものであり、「アメリカが国民としてすべてのあやまてる同胞たちを自由と民主主義の光へと導くように定められているという確信」と結びついていた。しかし、ボーンは「民主主義は内部からのみ押しつけられうる<sup>13)</sup>」と考え、次のように述べている。「もしドイツ国民が自らの政治的改造を実現しえないのであれば、誰もそれを彼らのために行うことはできない。彼らは征服者としての敵によって押しつけられる最もリベラルな政府よりも土着のホーエンツォーレルン家支配の帝国の方を選び続けるであろう。警戒的な勝者としての連合国による監視の下で民主主義を強制されるドイツはきっとヨーロッパの平和の絶えざる脅威となるであろう<sup>14)</sup>」。

だから、民主主義がドイツに押しつけられる必要はない。ボーンによれば、ドイツ自体の中に現在の戦争レジームへの服従から抜け出ようとする勢力が生じつつあると見られる。ロシア革命に見られたように、戦争のもたらす桁外れの殺戮がドイツ軍内部での上級幹部層の後退と下級層の台頭をもたらし、やがて軍部の民主化を引き起こす可能性がある。ドイツの民主主義の希望はそのような傾向の成熟にかかっている。「国土が消尽され、国民のモラルが破壊される前に、スピーディな戦争の終結が実現されることによって、この傾向が最もよく成熟するであろう」とボーンは考えた<sup>15)</sup>。そして、アメリカの参戦は全面的勝利まで戦争を長引かせることによって、戦争指導部へのドイツ国民の絶望的な支持を促し、この可能性を打ち砕くことになったというのがボーンの判断であった。かかる判断について、それは「目的と手段、目的と結果についての批判的で具体的な分析」に基づくものであり、「その鋭敏さは称賛に値する」という指摘がなされている<sup>16)</sup>。

では、それがボーンの「リアリズム」を示すものだとすれば、いかに評価さ

13) Ibid.,p.33. Cf.1917a,p.10.

14) Bourne1917c,p.33.

15) Ibid.,p.34.

16) Westbrook1991,p.202, Farrell,p.312.

れるのであろうか。キール軍港における水兵の反乱に端を発したドイツ革命、1930年代におけるヒットラーの台頭によるヨーロッパの国際秩序の攪乱という現実の展開をふまえれば、確かに鋭敏な洞察を含んでいるようにも見える。また第二次大戦後のヴェトナム戦争や現在のイラク戦争などに見られるアメリカ外交政策の基本的問題性を撃つ視点が含まれていると言えよう。だが、歴史の後知恵で言えば、ドイツ革命はやはりアメリカの参戦によってドイツの軍事的敗北が不可避となった段階で起きたことも事実であった。歴史にイフを持ち込むことを避けるべきであろうが、ボーンの主張について、「ドイツの勝利が世界にとってよりよい結果をもたらしたであろうということが確証されないならば、デューイの戦争政策がプラグマティズムの政治的破産の論破できない証拠とはならないだろう」という指摘を否定することはできないのではないだろうか。

## 2. 戦争の社会的可能性とデューイの理想主義

ボーンは、デューイが新たな国際秩序の創出という目的を実現するための手段として戦争を支持したことは間違いであると主張した。「戦争を一旦受け入れたならば、戦争が本来的に制約されている不可避的な方向に押しやられるしかない<sup>17)</sup>」、つまり、戦争においては敵に打ち勝つということが唯一絶対の目的であり、それ以外の「目的の選択が機能しなくなる状況」だと考えるべきだからである。換言すれば、戦争とはすべてのことが「勝利という一つの目的に従属しなければならぬ国民生活の緊急で、如何ともしがたい危機<sup>18)</sup>」であり、だから国民は戦時体制に巻き込まれざるをえない。ところが、ボーンによれば、デューイの哲学は個人の目的の選択が可能である世界でこそ適用可能であった。だから、戦争という如何ともしがたい苛酷な状況においてそれは破産するというわけであった。ここには、自我と外的環境の関わり方、社会的現実との関連での行為目的の設定の意味をどう理解しうるのか、換言すれば、デューイの理想主義はどのような思考方法と結びついているのか、といった彼の哲学の根幹

17) Bourne1917f,p.200.

18) Ibid.,p.198.



に触れるような問題が提起されていると言ってよい。この問題については、別稿においてデューイの戦後国際秩序構想を論じた際に若干触れたところであるが、ここでは戦争の社会的可能性についての彼の議論がどのような思考に基づいていたかという問題観点から検討してみよう。

デューイはボーンに直接反論していないが、次のような主張はボーンとの考え方の違いを示している。「我々の直接的目的を実現するために意図せざる諸力を利用しなければならない。しかしながら、その諸力は、ひとたび解放されると、作用し続け、予期しない結果を、そして最終的にはそのために奮闘した目的を覆い隠すような結果をもたらす。現在の戦争のような巨大な仕事も決して例外ではない」(1918c,p.551)。戦争において勝利の獲得という目的を実現するために、戦争テクニークを駆使してあらゆる種類の活動が行われ、装置や組織が作られる。だが、戦後においても「それらは独立の存在を獲得し、長期的にみれば、意識して望んだ結果よりも重大な意味を持つ結果を生じるかも知れないのである」(Ibid.)。デューイはここで人間の現実の具体的な行動には、その主観的意図ないし目的とその行動が生み出す客観的結果の間に乖離が生じることを踏まえて戦争の持つ社会的可能性について語ろうとしてしていると言ってよい。<sup>19)</sup>なるほど戦争の直接的な目的は勝利であるとしても、その実現の様々な努力が社会秩序に意図せざる結果として一定の変化をもたらすことがありうると考えた。そこに戦争のもつ社会的可能性を探る契機があるというわけである。

このようなデューイの思考の根底にあるのは、人間を取り巻く環境の不安定性、流動性、可変性という見方である。これを踏まえて知的行動による状況のコントロールの可能性という考え方が出てくるが、これはデューイ哲学の根本思想だと言ってよいであろう。意図せざる結果が生じるということは状況の不安定性や流動性を意味しており、しかも状況を動かしている諸力は単一ではなく、複雑で多面的であり、交錯しあい矛盾しあうこともあることを意味している。したがって諸力の絡み合いを分析し、どのような諸力を支持し、選択するか

19) Cf. Levine, p.241.

よって、人間による環境への主体的な働きかけの余地があると考えられるであろう。しかし、戦争の社会的可能性などありえない、だからデューイの哲学は戦争という環境においては崩壊せざるをえないというボーンの批判はこのようなデューイの考え方に注目していないように見える。しかし、それこそはデューイ哲学の本質部分をなし、彼の理想主義を支える思考方法だったのではない<sup>20)</sup>だろうか。

デューイは主権国家の枠組を相対化し、国際関係の再編を促す諸力は戦争という状況においてすでに働いていると見た。各交戦国における勝利という主観的目的の実現のための戦争遂行は意図せざる結果として世界の組織化への方向を促すだろうと見たのである。もっと言えば、歴史の趨勢として戦争があろうがなかろうが、人類の世界はその方向に向かわざるをえないと見ていたとも言えよう。もちろんその方向に向かう諸力に抵抗しそれを阻止しようとする諸力もまた状況の中で働いている。だから放っておいて自動的にその方向が実現されると考えることは誤りである。デューイがレッセ・フェールのな成り行きまかせを否定するのはこのためである（1916c,p.829）。望ましい方向を促進するような人間の側での働きかけが必要である。彼の理想主義の根拠はここにあったと見ることができる。だからそれは現実の動向からまったく遊離した抽象的な思考に基づくものではなかったと言ってよいであろう。

国際機構の問題を例に取れば、経済レベルでの人間の交通は国家の枠を超えて拡大しているにもかかわらず、政治的には主権国家の原理がなお幅を利かせている。ここにも現実を動かす対立しあう諸力の作用が見られるのであり、だから、どの諸力の方向に加担するかということにおいて人間の選択の余地があると考えたのである。もとよりデューイにとって戦争はできる限り避けられるべきであり、アメリカ政府の決定以前から参戦を主張していたわけではない。しかし、ドイツの潜水艦戦への対抗として戦争が始まったとき、それを支持した。

20) この点を理解しないと、デューイの理想主義は現実から遊離した空想的なものとしてしか見えなくなる。Westbrook1991,p.202. ただ、デューイの理想主義にアメリカニズムのバイアスが掛かっていないかどうかは別途検討すべき課題として残るであろう。これについては、井上を参照。

そして、戦争が終わったときに、その結果として少しでもましな社会状態が生じることを願った。その意味で、戦争再発を防止する国際機構を創出する機会として参戦を利用することを考えたわけである。

だが、ボーンはそんなことを考えてもまったく無意味だと批判した。むしろ戦争に入って何が生じたかを見るべきである。戦時下における市民的自由の抑圧、教育の荒廃など様々な社会的害悪が生み出されており、それはデューイが願った戦争の社会的可能性とそれに基づく目的の挫折を示しているのではないか。ひとたび戦争を認めれば、そのような事態は避けがたいのであり、ボーンにとってそれこそ戦争に反対する最善の理由である。戦争を受け入れれば、その環境を知的にコントロールすることなど不可能であり、戦争の局外にあってこそ、「出来事はある程度まで操作可能である」<sup>21)</sup>。だから、ボーンは武装中立策を主張したというのである。

こうしてボーンは戦争という非常時においてにおいて知性の働く余地などないとしたのであるが、これは戦争における知識人のあり方という問題を提起するものであった。それを検討してみよう。

### 3. 戦争と知識人

ボーンによれば、戦争は国民が打って一丸となり勝利をめざして邁進することを要請される非常事態であり、そのような苛酷な状況に対して「人は抵抗するか、それとも服従するかである」<sup>22)</sup>。そして、「戦争に、あるいはその公言された目的に懐疑的であれば、消極的な態度が唯一の可能な態度である」<sup>23)</sup>。心ならずも戦争体制に服従するという消極的な態度は自分自身に誠実ではないという点で、「高潔ではないかも知れないが、おそらく偽善者であったり、殉教者になるよりはましである」<sup>24)</sup>。ところがデューイは戦争に懐疑的な国民、特に青年たちに対して「別の方向に動いている諸力と良心を結びつける」(1917c,p.580)

21) Bourne1917f,p.200.

22) Ibid.,p.199. Cf.Bourne1917a,p.13.

23) Bourne1917f,p.201.

24) Ibid.

ことを語った。つまり、現実の動向に作用を及ぼしている諸力の中で、少しでもましな事態を生み出すであろうと思われる要素を見だし、それをさらに促す努力をすること、その意味で戦争を理想的な目的を実現する機会として捉えることを勧めたのである。ボーンはこれに激しく反発した。デューイの言明は国家による召集に応じて戦争に協力することがあたかも平和的な国際秩序の構築という理想的な目的の実現に貢献するかのよう<sup>25)</sup>に語ることに「戦争のための慰めの香油」を見いださせようとしているにすぎない。要するに、デューイの言説はドイツの知識人たちと同じように「国民を欺いて戦争に駆り立てようとしている<sup>26)</sup>」と思えたのである。

それに対してボーンは次のようなことを知識人のやるべき仕事として掲げた。すなわち、「アメリカの戦争が神聖な十字軍としての大衆的神話に陥ることを防止すること」、「革命的な副産物が生じるからといって、戦争は正当化されないし、また、それによって戦争が最も有害な害悪ではなくなることもないことを呼び続けること」、「死の世界のただ中で生を助長する教育、芸術、解釈のためのエネルギーと情熱を高めること」などである。そして、反戦のパトスを断固として持続することを強調しつつ、なお「旧理想は崩れた。新しい理想が創出されなければならない<sup>27)</sup>」と主張したのである。

しかし、ボーンはデューイ哲学の批判を行う中で新しい理想を創出する手がかりを失うことになったのではないだろうか。現実<sup>28)</sup>に根ざした理想の創出は知性の働きのなしには困難だと考えられるが、彼は戦時下における知性の機能を否定したからである。戦争では勝つことが唯一の目的だという観点から戦争の現実全体を理解し、それを絶対化したのはその現れと言ってよいであろう。奇妙なことにそれは主戦論者の戦争イメージと同一になってしまっているのである。この点に関してデューイは次のように考えた。平和主義者と主戦論者がともに

25) Bourne1917a,p.13.

26) Ibid.,pp.4-5.

27) Ibid.,pp.13-14. これについて、「ボーン<sup>28)</sup>の文化的価値は彼の批判と抵抗の能力を鋭くしたが、実践的な選択肢の把握力を彼に与えることはなかった」という指摘がある (Forcey,p.284)。

戦時における悲惨と破壊の現状に目を奪われ圧倒されてしまい、戦後における将来の事態のあり方に関心を示さない。抽象的な正義や情熱に支配されて将来へのプラグマティックな考慮が働かない。だから戦争目的、講和条件、戦後構想への知的に抑制された議論が出てこない。しかし、人々を戦時下の苦難に耐えさせるのは戦後の社会のあり方への希望ではないかというわけである（1917 g,pp.594-5）。

かくして、デューイは戦争がいかに苛酷な如何ともしがたく見える事態であれ、その現実にはボーンが一面的にかつ固定的に捉えたよりも複雑な多面性や流動性を持っており、したがって勝利第一主義に向かう諸力とは「別の方向に動いている諸力」も含んでいると考えた。それによって主戦論者に見られるような勝利を唯一の目的とする硬直的な政策と、そしてそれに反発するボーンたちの平和主義の双方を相対化しようとした。つまり、戦争の渦中で作用している諸力の動向を把握することによって、現状の変更をもたらす可能性と方向を探り、戦後のあるべき社会秩序の構想を描こうとしたのである。そしてそれを生み出す知性の働き、思考方法を擁護し、強調することが知識人の責任だと考えたのである。私見によれば、ボーンの批判はデューイのこの側面を看過し、否定してしまうように思われるのである。しかし、デューイの立場は結果的に勝利第一主義の主戦論に協力する（屈服する）ことになる可能性（危険性）がないとは言えなかった<sup>28)</sup>。ボーンの批判はそれに警告を発する意味を持っていたと言えるであろう。

ボーンは、国民が戦争に反対の気持を持っている場合、戦争になってしまえばすべてがもう遅い。だから、国家が戦争に入る前にそれを防止するように努力することが重要だと考えた。ボーンたちはそのような努力としてアメリカが

28) ボーンは、戦争についての社会科学的認識がすべて主戦論の戦争テクニークに吸収されると見ていたが、デューイはそう考えなかった。だとすれば、技術主義におちこむ危険を回避できるような社会科学のあり方を構想する必要があるであろう。デューイの哲学がそれをできたかどうかの本格的検討は他日の課題であるが、とりあえず拙著1991を参照。この問題をめぐるボーンとデューイの対立は第二次大戦期の日本の生産力理論をいかに評価するかという問題に通じるように思われる。高島、山之内、米谷を参照。

戦争に入る前に参戦についての国民投票を行うことと武装中立策を提起したが、実現されずに終わったと述べている。そしてデューイたちはそれに真剣に取りくもうとしなかったと批判している<sup>29)</sup>のである。しかし、デューイは大戦後に挫折の経験を通してボーンの批判が含んでいたそのような教訓を深刻に受けとめたように思われる。というのも彼はやがて戦争違法化の立場に移行したのであるが、それは平和認識における戦争の意義を否定し、戦争を防止するためにどうすべきかという観点から、そのプログラムやスキームそして国民の行動を考える方向に進むことを意味したからである。

### Ⅲ デューイにおける挫折と転換——戦争違法化へ

別稿にて述べたが、デューイは大戦へのアメリカの参戦を支持する態度決定の基礎に、戦争が望ましくない結果を最少に抑えながら、望ましい結果を実現する最も効率的な方法であることを示すことができなければ、暴力の行使として非難されるべきだという考え方を持っていた。だから、参戦支持がはたして妥当であったのかどうかは、1918年11月に戦争が終わり、翌年6月ヴェルサイユ講和条約が調印されて、その結果がどうであったかによって判断されることになった。ヴェルサイユ条約は国際関係において強国が弱小国を無視し、力が権利を作るという旧態依然の内容を含んでおり、「すべての国家に対する正義に基づく新たな国際秩序」を創出するという目的が実現されたとはどうてい言えなかった。それゆえにデューイは「理想主義の目的の挫折は莫大であると言っても誇張ではない。あくまでも参戦に反対した平和主義者の方が自らの正当性を主張できるであろう」（1919a,p.630）と率直に語り、ボーンたちの優位を認めたのである。

だが、デューイはアメリカの参戦がまったくの間違いであったとは見ていない。なぜなら、アメリカが参戦をせずに、「もしドイツが勝利していたならば、事態はより悪くなっていただろうという十分ではないが真実の抗弁」をなすこと

29) Bourne1917d,p.38, 1917f,p.201.

ができる (Ibid.)、つまり、理想主義的な目的は実現されなかったけれども、アメリカの安全保障を含む国益の観点からの参戦の目的は実現されたと考えるからである。

デューイは理想主義的な目的の実現が挫折したことを認めたが、しかしボーンの批判にも関わらず、それを掲げたことを間違いだとはなお考えなかった。問題はなぜ実現できなかったのかである。彼は、「挫折の真の原因は力を適切にかつ知的に行使しえなかったことである」と理解した (Ibid.,p.631)。アメリカは確かに軍事力を行使した。その結果は理想目的の挫折であり、したがって軍事力という手段は目的の実現に役に立たなかったということを確認したのである。そして力を軍事力に限定して考えることは不十分だと理解した。それが「力を適切にまた知的に行使しえなかった」ということの意味である。具体的に言えば、軍事力以外の力を手段としてもっと有効に使用すべきだった。つまり、「現代の生活においてより顕著な諸力—産業、商業、金融、科学の研究や討論、人間的交流の実際—の組織化と断固とした行使」である (Ibid.,p.635)。だから、参戦の初期の段階で、アメリカが持っていた軍事力以外の力、例えば情報力や経済力を徹底的に駆使することができていれば、交戦国間の秘密協定の存在を察知し、連合諸国に廃棄を迫ることによって、アメリカの理想主義的な目的の実現を妨害する要因を除去しえたであろう。

なぜそうできなかったのかと言えば、理想の実現に際して「道徳的感情を有効な力と見なしてそれに傾倒してしまう」ような「センチメンタリズム」に陥り、したがって、正義は必ず勝つという現実離れた楽観主義とか、また「道徳や理想は自動的に実現され、自動的に推進される」とするアメリカの福音主義的運動にありがちな偽善とかが幅を利かせていたからである (Ibid.,p.631)。その結果、アメリカはなるほど軍事力を行使したけれども、それ以外にアメリカが持っていた力を徹底的に利用して理想的目的を実現するという努力を欠如することになったというのである。

デューイは戦時期の理想主義の挫折によって、理想とか理想主義の立場が不

信の目で見られるようになることを恐れた。それらは所詮「空想主義、見通しのない情緒主義」と同じであり、「邪悪な計画を実施する際にそれを覆い隠す言葉の飾り」として見なされるようになってはまずいというわけである。なぜなら、そうなった場合に生じるのは、一方で実現の手段としての力と結びつかない「理想への耽溺」（絶対的平和主義）と、他方では理想を欠いた「現実主義的なやり方での力の行使」（闇雲な主戦論）という二つの行動様式の対立であり、「我々がこの対立を認める限り、一方で我々の理想は無力なものとなり、また、他方で力をもっぱら軍事力と考える人たちの思うつぼにはまることになる」と考えられたからである（Ibid.,p.635）。

最後に大戦期の経験でデューイに深刻な反省を迫ったことは、戦争が望ましくない事態を生み出したということ、すなわち戦時体制下での国民の自由や権利の行き過ぎた制限が見られたことであった。彼は戦時下においてある程度の制限が生じることをやむをえないと見ていたようであるが、戦争反対への弾圧は大学や学校での教員への免職という極端な圧迫として彼の身近なところでも現れてきた。デューイは国民のモラルの高揚には表現の自由が重要だと主張したが、それは無視された。この事態はボーンが当初から予測し、きびしく批判していたことであり、彼もこれは非常に身にしみたとされる。後年デューイは第二次世界大戦へのアメリカの参戦に反対するさいに、その主要な理由の一つとして戦時下の自由の抑圧の危険性を揚げたのであるが、そこにボーンの批判が生きていたと言えるであろう。

大戦後においてデューイの平和思想は180度の方向転換を遂げた。平和の問題を考えるとときに戦争の意義を認めない戦争違法化の立場に移行したのである。だから平和のための戦争という考え方は峻拒され、軍事力という手段に依拠しないで国際平和の創出を追求する方向に進むことになった。さらに、この立場は国際法において国家間の紛争を解決する手段としての戦争を放棄することによって主権国家の枠組を相対化しようとする意味を持っていた。これらのことを含めて1920年代以降のデューイの平和思想の展開を検討することが次の課題



<sup>30)</sup>  
である。

### 付記

本稿は、別稿「第一次大戦とデューイ」（『彦根論叢』358号に掲載、2006年、3月刊）とともに、日本デューイ学会第48回研究大会（2004年10月）のシンポジウム「プラグマティズムの平和論」に、「第一次大戦とデューイ」という題目で行った発表の原稿を分割して再構成したものである。本稿での議論の前提になっていることもあるので、ぜひ別稿を参看されることを希望したい。

### 参考文献

デューイの著作

- 1908 *Ethics, The Middle Works of John Dewey*, Vol. 5 (Southern Illinois University Press), 以下, MWと略記。
- 1915 *German Philosophy and Politics*, (Books for Libraries Press, 1970) 足立幸男訳  
『ドイツ哲学と政治』（木鐸社, 1997）
- 1916a Force, Violence and Law, *Characters and Events* (Octagon Books, 1970), 以下, CEと略記。
- 1916b On Understanding the Mind of Germany, CE
- 1916c Progress, CE
- 1916d Force, Violence and Law, CE
- 1917a In a Time of National Hesitation, CE
- 1917b War's Social Results, *The Later Works of John Dewey*, Vol. 17
- 1917c Conscience and Compulsion, CE
- 1917d The Future of Pacifism, CE
- 1917e What America Will Fight For, CE
- 1917f Constriction of Thought, CE
- 1917g Fiat Justitia, Ruat Coelum, CE

30) 第一次大戦後のデューイの平和思想の転換は、日本国民が第二次大戦の惨禍を経験し、その反省に基づいて戦争放棄へと移行したこととパラレルであるように見える。日本国憲法9条が戦争違法化思想の影響を受けていることも事実であり、したがって、デューイの平和思想を検討することは、憲法9条と戦後日本の平和主義の思想的意味を考えることにも繋がると思われる。その準備的作業として不十分ではあるが、拙稿1983, 1996を参照。また、第二次大戦へのデューイの対応については、拙稿1985を参照。

- 1917h In Explanation of Our Lapse, CE
- 1917i Democracy and Loyalty in the Schools, MW, Vol. 10
- 1918a America in the World, CE
- 1918b Internal Social Organization after the World War, CE
- 1918c What Are We Fighting For ?, CE
- 1918d The Approach to a League of Nations, CE
- 1918e The Fourteen Points and the League of Nations, MW, Vol. 11
- 1919a The Discrediting of Idealism, CE

その他の文献

Bourne, R.

- 1917a War and Intellectuals, in *War and Intellectuals*, Edited by Resek, C., 1964, (Harper & Row)
- 1917b Below the Battle, Ibid.
- 1917c The Collapse of American Strategy, Ibid.
- 1917d A War diary, Ibid.
- 1917e Twilight of Idols, Ibid.
- 1917f Conscience and Intelligence in War, in *John Dewey The Political Writings*, Edited by Debra Morris and Ian Shapiro, 1993 (Hackett)

Bullert, G.,

- 1983 *The Politics of John Dewey* (Prometheus Books)

- 1989 John Dewey and Fascism: A Response, *Educational Theory*, Vol. 39

Ceadel, M.

- 1980 *Pacifism in Britain 1914-1945: The Defining of a Faith* (Clarendon Press)

Clayton, B.

- 1984 *Forgotten Prophet The Life of Randolph Bourne* (Louisiana State University Press)

Cywar, A.

- 1969 John Dewey in World War: Patriotism and International Progressivism, *American Quarterly*, 21

Diggins, J. P.,

- 1981 John Dewey in Peace and War, *American Scholar*, 50

Farrell, J. C.

- 1975 John Dewey and World War I : Armagedon Tests A Liberal's Faith, *Perspectives in American History*, 9

Forcey, C.

- 1961 *The CrossRoads of Liberalism* (Oxford University Press)

Hook, S.

- 1979 Introduction of *The Middle Works of John Dewey*, Vol. 8 (Southern Illinois University Press)

Howlett, C. F.,

- 1977 *Troubled Philosopher John Dewey and the Struggle For World Peace* (Kennikat Press)

- 1989 "Twilight of Idols" Revisited: A Reply to Gary Bullert's John Dewey on War and Fascism: A Response", *Educational Theory*, Vol. 39, No. 1

Hughes, J.

- 1987 *American Economic History, Second Edition* (Scott, Foresman & Company)

Karier, C.

- 1977 Making the World Safe for Democracy: An Historical Critique of John Dewey's Pragmatic Liberal Philosophy in Warfare State, *Educational Theory*, Vol. 27

Lasch, C.

- 1965 *The New Radicalism in America* (Knopf)

Levine, D.

- 1969 Randolph Bourne, John Dewey and the Legacy of Liberalism, *The Antioch Review*, Vol. 29,

Ratner, S.

- 1988 John Dewey's Philosophy of War and Peace, in S.Hook, W.L. O'Neil and O'Toole (eds.) *Philosophy, History and Social Action* (Kluwer Academic Publishers)

Resek, C.

- 1964 Introduction of *War and the Intellectual essays by Randolph S.Bourne 1915-1918* (Harper and Row)

Shannon, D. A.

- 1969 *Twentieth Century America, Second Edition* (Rand McNally)

Westbrook, R. B.

102 門脇延行教授退職記念論文集（第359号）

1991 *John Dewey And American Democracy* (Cornell University Press)

1993 *An Innocent Abroad? John Dewey and International Politics, Ethics and International Affairs, Vol. 7*

大下尚一・有賀貞他編

1989 『資料が語るアメリカ』（有斐閣）

高島通敏

1960 「生産力理論」 思想の科学研究会編『共同研究 転向 中巻』（平凡社）

プロイエル, H.P., 平野一郎監訳

1971 『大學知識人の思想史 ドイツ大學の虚像』（黎明書房）

本間長世

1996 『思想としてのアメリカ』（中央公論社）

井上弘貴

2005 「20世紀アメリカ知識人の国際関係思想とそのアメリカニズム的特質—第一次世界大戦～冷戦初期のジョン・デューイとラインホルド・ニーバーを中心に—」  
『政治思想研究』第5号（日本政治思想学会）

2005 「戦間期のアメリカにおける戦争違法化運動とジョン・デューイの国際関係思想」  
『早稲田政治公法研究』第79号

米谷匡史

1997 「戦時期日本の社会思想—現代化と戦時変革—」『思想』882号（岩波書店）

雀部幸隆

1999 『ウェーバーと政治の世界』（恒星社厚生閣）

山之内靖

1999 『日本の社会科学とウェーバー体験』（筑摩書房）

ロマン・ロラン

1914 『戦時の日記』（『ロマン・ロラン全集』26巻, みすず書房, 1963）

脇圭平

1973 『知識人と政治』（岩波書店）

マックス・ヴェーバー, 脇圭平訳

1919 『職業としての政治』（岩波書店, 1980）

小西中和

1983 「ジョン・デューイの平和思想についての一考察」横越英一・他編『政治学と現代世界』（御茶の水書房）

- 1985 「1930年代におけるジョン・デューイの政治論についての一考察（2）」『東海女子大学紀要』第4号
- 1991 『デューイ政治哲学研究序説—思想形成過程試論—』（滋賀大学経済学部研究叢書19号）
- 1996 「デューイ平和思想への視点」滋賀大学『彦根論叢』300号
- 2003 『ジョン・デューイの政治思想』（北樹出版）
- 2006 「第一次大戦とデューイ」滋賀大学『彦根論叢』358号